

地震被害 短時間で分析

川崎駅近くに監視カメラ

防災科学技術研
川崎ラボラトリー

【川崎】防災科学技術研究所防災システム研究センター川崎ラボラトリー（川崎市川崎区、後藤洋三所長、044・329・1126）は、川崎市内のソフト開発メーカーと共同で、地震発生前後の画像を比較して被害状況を分析する早期災害モニタリングシステムの実証テストに乗り出した。JR川崎駅周辺を見渡せる12階建てビル屋上に監視カメラを設置して、写真画像と地図から生成する建物の3次元モデルの検証などを行う。10月中旬までデータを収集し、実用化にめどを付けたい考えだ。

画像・地図で3次元モデル検証

地元企業と共同開発



JR川崎駅周辺を見渡せる12階建てビル屋上に設置された監視カメラ

早期災害モニタリングシステムは、文部科学省の大都市大災害軽減化特別プロジェクトの一環として開発に着手。平常時の写真画像と災害発生後の画像を比較し、早期に被害状況を把握すること（自治体など）の防災に役立てる（エム）を狙っている。建物3次元モデルなどの開発はソフト（川崎市川崎区、常山勝彦社

長、044・245・0975）が担当。電荷結

合素子（CCD）カメラ、パソコン、無線LANで構成するシステム製造は久下精機（川崎市高津区）、伊藤工業が手掛けた。

今回の試験では川崎市の協力を得て川崎市産業振興会館（川崎市幸区）の屋上に設置し、240度角で半径100mの自動監視を遠隔操作で行う。システムの防水性能などの耐久性試験のほか、撮影した写真データと地図上の建物を自動的に結びつけて3次元モデル化するソフトの実証に重点

を置く。「写真データと地図上の4階以上のビルが60%以上マッチングできれば実用化にめどが立つ」（常山社長）としており、200万円程度で設置可能という。

川崎ラボラトリーによると同システムは市街地や幹線道路に設置することでハリコブターや気球のモニタリングに比べ災害発生時の早期対応に貢献しているとしており、今回の結果を踏まえ実用化へ向けた試験を年内に再度行う方針。